

生徒の描画活動と支持体の関係性についての基礎研究

— 素材に関する文献調査による課題の整理 —

松浦 藍

本研究の目的は、絵画作品制作における素材としての支持体である画用紙を、生徒自ら選択する経験が表現活動に与える影響を明らかにすることである。本稿はその第一次研究にあたる。本稿では、創造性教育が重要視されるようになったと考えられる時期から現在に至るまでの、素材に関する先行研究の傾向について考察した。その結果、中学校教育での表現活動において、画用紙等の支持体を素材として認識する傾向が弱い現状を確認できた。しかし、創造性の育成を目指す学習での支持体の役割を先行研究から検討することはできなかった。そのため、第二次研究では、本稿での調査を踏まえ、中学生を対象とした実践研究の必要性を確認することができた。

Keywords：美術教育，素材，支持体，表現活動，創造性

1 研究の目的

本研究の全体の目的は、絵画作品制作において支持体となる画用紙を生徒自ら選択することが、表現活動に与える影響を明らかにすることである。本稿では、本研究の目的達成のため、支持体を選ぶ学びの意義について整理する。しかし、筆者が知る限り、多くの実践で支持体は定型の大きさのまま配布して描く動を行う美術科の授業実践が散見される。しかし、実際のアートでは、フランク・ステラ (Frank Stella) 等、支持体への挑戦が新たな表現を生む可能性についても追究されるようになってきた。

新たな表現等の新奇性を求める創造性という視点で美術教育を捉えるならば、生徒の表現活動においても、これまでの経験を活かして、新しい表現に向かおうとすることが重要であると言えよう。新しい表現に向かおうとする授業とは、新しい素材による表現活動だけでなく、これまで使ったことのある素材から新しい表現を探る活動も想定されよう。

しかし、先述の通り、美術教育で生徒の考えや表現の意図とは関係なく、教師に与えられた画用紙に

描く活動しかしていないことについて、無批判に受容していると言わざるを得ない。

そこで、本稿では、美術教育における創造性の定義を整理した上で、改めて素材に関わる論考の中でも、「支持体」に着目した論考について、創造性の観点から教育的意義や役割を検討する。尚、本研究において、本稿は第一次研究にあたるものとなり、第二次研究以降では、本稿での検討内容を踏まえた実践研究を行い、本研究の目的達成を目指す。

2 本稿における創造性の定義

(1) 個人における創造性

筆者の創造性の育成に関するこれまでの研究では、創造性を個人における新しい価値として捉えている。これは、Ronald A. Beghetto と James C. Kaufman が述べた 4 つの創造性モデルの中の「mini-c」を想定している。Beghetto らによれば、「mini-c」とは「経験、行動、活動に対して自分なりに新しい感じ方や見方をする (筆者訳)¹⁾」創造性と定義している。また、他 3 つの創造性は、①既

存の「社会文化的な影響レベルにより創造性を卓越した創造性（筆者訳）」である「Big-C²⁾」と、②「長年にわたって専門知識を得た（筆者訳）」卓越した創造性として「Pro-C³⁾」と、③「日常の創造性（筆者訳）としての「little-c⁴⁾」と述べている。

筆者の研究においてBeghettoらの4つの創造性のモデルを用いる理由は、多岐にわたる創造性の定義を包括しているからである。創造性の定義についてMihaly Chikszentmihalyiの「社会文化的な影響のレベルにより創造性を卓越した創造性（Big-C）（筆者訳）⁵⁾」と「日常の創造性（little-c）（筆者訳）⁶⁾」の2つでは、「創造性の発達の性質を検討⁷⁾」するには足りない指摘し、「より広い概念的枠組みが必要である（筆者訳）⁸⁾」と指摘している。

さらに、4つの創造性のモデルの内「mini-c」を用いる理由は、すべての人に発生し、学習に内在するものであるため、学校教育や美術教育を扱う本研究の目的に即しているからである。その根拠として、Beghettoらは、まれな場合を除き、創造性は「誰もがmini-cで始まる（筆者訳）⁹⁾」とし、「教師、保護者やメンターによって、助けられることが奨励される（筆者訳）¹⁰⁾」と述べている。

(2) 美術科の学びの過程における創造性

美術科の学習活動を通して、創造性の育成を目指した先行研究として清田哲男の示した「創造性が社会と出会う美術教育 Art Education Nurturing Creativity through Encounters with Society: ANCS」(以下、ANCSと表記)が例として挙げられる。ANCSについて清田は、以下の通りに述べた¹¹⁾。

児童・生徒が、自己の創造性を育むことを通して、未来を考え、地域社会で新たな価値や課題を発見し、それらの達成、克服のために、主体的な学習への姿勢を培うための小学校から高等学校までの長期的な美術教育カリキュラムの構築を目指している

つまり、ANCSにおける創造性は、個人にとっての価値を、社会での「新たな価値」になりえる存在と捉えていることが分かる。

そして、清田はANCSの学習過程として図1¹²⁾のように示した。さらに、図1で示されたSTEP1からSTEP3についての説明を表1にまとめた¹³⁾。

STEP1からSTEP3の過程を、本研究で取り上げる生徒と支持体との関係で考えてみる。仮に、中学1年生の生徒Aが、授業以外の時間に小学校で得た知識の通り四つ切の画用紙に描画する姿は、STEP1

の第一接面に該当する。そして、生徒Aが授業を通して、画用紙の特徴を理解しつつ、これまでとは異なる使い方を見つけた時がSTEP2の姿となる。例えば、クラスメイトが画用紙をちぎっている姿を見たり、教科書に載っている画用紙の特性を知ったりすることで、ちぎった画用紙を張り合わせてから絵の具を塗るようになる姿が挙げられる。そうすることで、ちぎった画用紙の端から絵の具が染み込んでいき、生徒Aは平らな画用紙と異なる描き味に出会う。つまり、生徒Aがクラスメイトや教科書が示した画用紙の使い方を知り、これまでとは異なる画用紙の「価値」に気が付くようになったと言えよう。

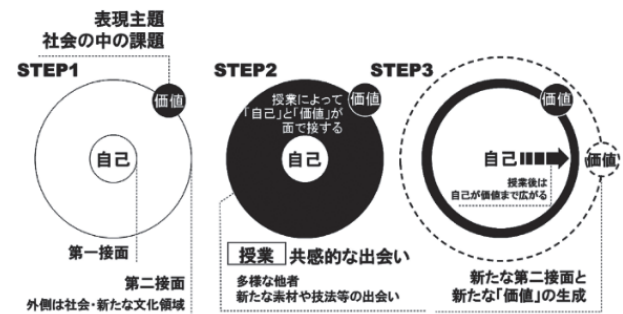


図1 清田が示したANCSの学習過程(本文抜粋)

表1 「創造性が社会と出会う美術教育」の学びの各過程の説明(本文抜粋)

各過程	清田による説明
STEP1	「現在理解している造形要素、表現技法を第一接面」とし、「まだ自己が第二接面に辿り着く手立てや授業が無い状況である。」
STEP2	「児童・生徒の力で、第二接面上の価値に到達させるために第一と第二接面の間にある学級（中間集団）に授業」が設定され、「児童・生徒のこれまでの経験の連続性や共感性による育まれ方によって、第二接面のエリアが異なる。」
STEP3	「授業によって、自己が第二接面まで広がることで、生徒自身が社会の中で新たな第二接面と価値を設定することを繰り返す、新たな文化領域を広げていく」

最終段階であるSTEP3の姿として、クラスメイトだけでなく、画用紙という素材を用いたアーティスト作品や、また画用紙の製造工程に興味を抱いたり、画用紙以外の新しい支持体で作品制作をしようとしたりする生徒Aの姿を想定できよう。

以上のことから、生徒がこれまでの価値に触れ、主体的に表現活動に向かう学習活動を行うためには、生徒と素材との出会い方や、文化の中で蓄積さ

れてきた素材に関する知識の活かし方を吟味する必要性が窺える。

3 素材としての支持体の意義

(1) 素材の定義

素材について、竹内敏雄は「表現手段としての素材、すなわち媒材 (medium)」と「表現対象としての素材、すなわち題材 (subject, sujet)」と述べている¹⁴⁾。

具体的に前者の意味は、生徒が「何に描くか」と考えることに該当し、後者は「描く対象としての画用紙」を考えることに該当すると言えよう。

本研究で取り上げる素材の意味は、竹内が述べる前者の素材として捉えることとする。

(2) 学習活動における素材の制限

第2章では、清田の論に基づき、生徒が新しい価値を発見し、他者と共有する学習の過程において、素材との出会いも含まれていることについて述べてきた。

しかし、学校の学習活動において、授業時間数や教材費の制限もあるため、使用できる素材の種類は限られている場合が多い。また、指導者や児童、生徒が展覧会への出品を想定している場合、支持体や描画材等についての規定に沿う必要がある。

また、授業の中で用いられる素材について、エリオット・W・アイズナー (Elliot Wayne Eisner) は「ひとたびこうした諸条件が教室で設定されると、生徒にとってすべての製作要素が限定されてしまうことになる。(仲瀬律久他訳)¹⁵⁾」と述べた。支持体の大きさや種類を決めると、自ずと描画材や、用具が定まってくる。換言すれば、教師が決めた素材だけを用いることは、児童生徒の表したいことに関わらず、描画材や用具の選択も狭まることになる。そのため、アイズナーが述べたように、表現活動において生徒の「製作要素が限定されてしまう」可能性が高くなる。ただし、アイズナーは「条件の適切性は、生徒の特質と題材の目的に関する観点から決定される (仲瀬律久他訳)¹⁶⁾」とも述べており、生徒が表現活動に対する目的の必要性についても主張している。

(3) 素材の制限による表現の広がり

その一方で、絵画の画面の形が表現活動を広げるという主張もある。伊藤彌四夫は東洋の絵画を例に挙げ「扇やうちわ、陶器の皿やつぼなどの絵は、その形を巧みに生かすように図柄が構成されている。このことは、絵画は画面の形で作者の想像を発揮さ

せ、新しい美をつくりだしたことを立証している¹⁷⁾」と述べた。ただし、伊藤は子どもの絵画表現では「空間に対応する能力や必要に応じて絵画の手法を生かす力等こどもの内面に総合的に働く能力を発達させるためにも、画面の大きさや形の規定を外し、必要に応じて、いろいろな形の画面に描く経験を与えるべきである¹⁸⁾」と述べた。伊藤の主張をまとめると、画面の形を限定することは、作者の想像を促すだけでなく、子どもの表現活動において、教師が子どもの空間を感じ取る力や、表現に関わる技術、表現に対する意欲等に応じて画用紙の形や大きさを決めることになる。教師が素材の選択を行うことについて、東山明も「これから何をどのようにかくのか、目的に合わせて用意する¹⁹⁾」と、生徒の目的に合わせて用意するよう述べている。伊藤と東山の主張は、子どもの目的を教師が想定して支持体を用意するというものである。これは、子どもが素材を決めることを前提とするアイズナーの主張とは異なる。つまり、素材の選択を子ども自身にゆだねることと、教師が選択肢を用意することが、表現活動に与える各影響について検討する余地があると言えよう。

4 素材としての支持体の捉え方に関する仮説

伊藤や東山の主張のように子どもの目的を教師が想定して支持体を用意する以前に、支持体を素材として認識していない可能性もある。仮に、素材として支持体を見ていたとしても、先行研究では注目されなかったり、素材として研究対象にならなかったりという状況も想定されよう。そうであるならば、本来は描画での素材の一つである支持体が、素材として認識されない要因についても検討が必要である。

その予想として素材を対象としている論文での「素材」とは、操作することを意識できる対象ではないか。操作とは、切る、折る、曲げる等、素材に関わる行為である。そのため、支持体は操作する対象として認識されにくい可能性を否定できない。

美術や図画工作に関わる研究者に支持体の操作が可能である認識が広まれば、支持体から操作し、新しい絵画による子どもたちの、表現が可能になると考える。

さらに、支持体である画用紙という紙を、素材として認識されることは、これからの学校教育の美術教育の新奇性を伴う創造的な表現活動へと子どもたちを導くことが期待されよう。

5 素材に関する先行研究の調査方法

表現活動と素材の関係性を主張する先行研究は多い。しかし、美術教育の学会誌における素材に関する論文の文献調査は行われていない。また、素材として支持体が認識されていない可能性も踏まえ、本稿では「素材」として広く調査する必要があると判断した。そして、創造性の育成という視点で、表現における素材の在り方を検討する本研究の独自性や妥当性の吟味が必要である。そこで、以下の手順で、美術科の授業における表現活動で素材に関する論文の集計を行う。

(1) 調査対象の学会誌

本稿で調査対象とする学会誌は、J-STAGEとciniiにおいて、「美術教育」と「学会誌」というキーワードで検索し、該当した日本の学会誌を扱うこととした。そうすることで、日本の美術教育に関する研究を網羅できると判断したからである。

その結果、大学美術教育学会の学会誌『美術教育学研究』、日本美術教育学会の学会誌『美術教育』、美術科教育学会の学会誌『美術教育学』が該当したため、三誌を本稿の調査対象とした。

(2) 調査対象の期間

本研究は、創造性の育成を目指す表現活動での素材の役割を検討するため、調査対象とする期間を、1989年（平成元年）から2022年（令和4年）までの34年間と設定する。

それは、1989年（平成元年）に改訂された学習指導要領で、「造形遊び」や「鑑賞教育」等の新しい学習活動が拡大されたのは、「創造性の開発」を目指す背景もあり、これまでとは異なる美術科での学びを目指すようになった年だからである。具体的には、「造形遊び」の拡大や、「鑑賞教育の重視」が挙げられる²⁰⁾。つまり、表現活動において素材の新しい価値を模索し始めた時期だった可能性が高い。

また、学校教育の流れにおいて、個人の日常生活を重視するようになったのは、1989年（平成元年）である。1989年（平成元年）に改訂された学習指導要領には、臨時教育審議会での答申が反映されており、その答申の中では、「創造性は、個性と密接な関係をもっており、個性が活かされてこそ真の創造性が育つものである。²¹⁾」と明記され、個の尊重と創造性の開発との関連性を強調している。

さらに、1998年（平成10年）から1999年（平成11年）に改訂された学習指導要領では、「総合的な学習の時間」が設置され、子どもが横断的に教科で

得た知識を活用し、課題を探究する機会が設けられた。「体験や経験を通して得られた知識は問題解決や創造的発想により効果的である²²⁾」と弓野憲一が指摘するように、総合的な学習の時間は、教科教育以外の時間にも創造性を発達させる機会を設けたと捉えることができよう。その点からも、創造性が成長するための素地が、個性として捉えていることから、Beghettoらの述べた「mini-c」のように全ての人にとっての体で取り組み出された時期である可能性が高い。

(3) 集計する素材に関する論文の条件

調査期間に投稿された学会論文の中で、①題名に「素材」もしくは、素材の固有名詞を明記している論文、②キーワードに、「素材」や「素材名」を明記している論文、③①や②に該当しなくても論文の考察の中で素材について述べている論文の3つの条件に当てはまる論文を集計することとする。

(4) 素材に関する論文の分類

素材に関する論文を集計する際、①各年における素材に関する論文数の推移、②研究対象者の立場と所属、③素材の種類、④論文の内容、の4つに分類することとした。

6 素材に関する論文の調査結果

1989年（平成元年）から、2022年（令和4年）の期間における論本数は2626本であった。そのうち、素材に関する考察がなされている論文は、91稿であり、3.47%であった。さらに、本研究が対象としている支持体について論究しているのは、わずか2稿だった。

以下は、第5章第4節で示した分類に基づいて集計した結果である。

(1) 各年における素材に関する論文数の推移と研究対象者の内訳

1989年（平成元年）から、2022年（令和4年）にかけての素材に関する論文の割合の推移を算出した（図2）。また、図2では、各年における素材に関する論文の研究対象者の内訳も示している。

確認された研究対象者は「就学前」、「小学校」、「中学校」、「高校」、「特別支援学校（以下、特支と表記）」、「大学」、「社会人」である。研究対象者が人ではなく、素材そのものであったり、研究対象者に関する表記がなかったりした場合は、「特になし」としてカウントした。

ただし、素材に関する論文1稿に、複数の研究対

象者が設定されていた場合は、どちらもカウントした。そのため、頻出回数ではなく、素材に関する論文数に対する研究対象者の割合で算出した。

顕著な結果として、最も素材に関する論文数の割合が高い年は、2018年、2021年、2020年の順であった。

(2) 調査対象者の立場と所属

素材に関する論文の研究対象者の割合の詳細を算出した(図3)。図3の調査結果では、小学校での教育活動を取り上げた論文が最も多いことが分かる。最も少なかったのは、社会人であった。

研究対象者の中でも、教師を対象とした素材に関する論文は、小学校でしか行われていない。

本研究の対象者である中学生は、小学生の児童の割合の半分以下の割合となった。ただし、図2の結果では、2017年以降、毎年中学生を対象とした素材に関する論文が掲載されている。

(3) 素材の種類

素材に関する論文で取り上げている素材の各種類の割合を算出した(図4)。

確認できた素材の種類は、粘土、木、紙、絵の具、石であり、その他には「素材」というキーワードを挙げている論文や、1稿でしか確認できなかった素材、例えば水性糊、綿布、パイプ、石鹸、鉄等が含まれている。

図4の結果において、粘土、絵の具の順で割合が高かった。その一方で、石、紙の順で割合が低かった。ただし、木と紙の割合の差は小さい。

(4) 素材に関する論文の内容の割合

素材に関する論文の内容を集計すると、大きく分けて7つの項目に分類して集計し、その割合を算出した(図5)。分類した各内容については、表2で示した通りである。尚、表2には、該当する論文の中で最も最近掲載された論文を例示している。

図5の結果では、「表現活動」の割合が最も高く、その次に割合が高いのは、「素材分析」である。また、最も割合が低かった項目は、「鑑賞活動」であり、その次が「環境」である。

7 考察

ここまで、1989年(平成元年)から、2022年(令和4年)の期間における素材に関する論文を分類し、素材に関する論文の傾向について調査してきた。

本章では、集計結果を踏まえ、支持体を研究対象に該当する点や、創造性の育成に資する点について述べる。そして、素材に関する論文の特徴から、第3章で述べた仮説の検討を行う。

(1) 支持体を研究対象にした論考

素材に関する論文の内、支持体についての論文は2稿のみであった。

2006年に行われた小田久美子・高橋敏之の研究では、実際の子どもの絵画表現を検討している²³⁾。具体的には、3歳児から6歳児を対象として、絵本の読み聞かせを行った後「画用紙に輪郭の一部が描いてある場合」(小田らはこれを輪郭画用紙と命名)と、

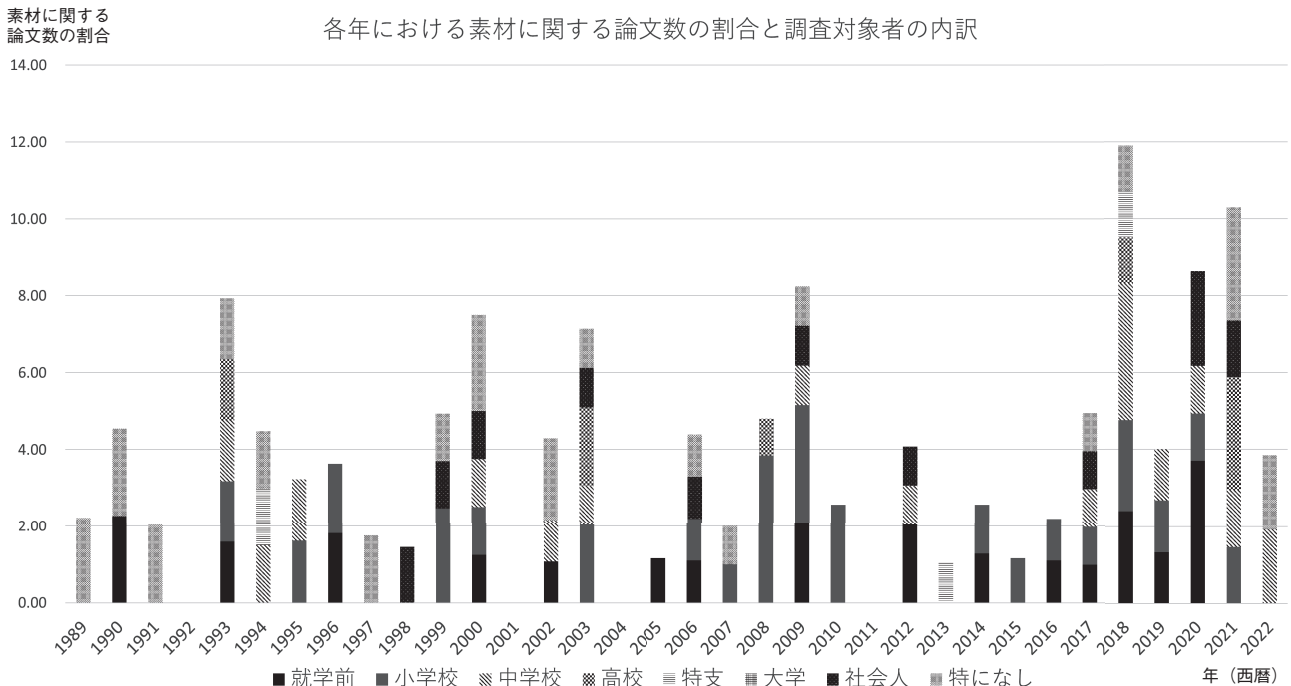


図2 各年における素材論文数の推移と調査対象者の内訳

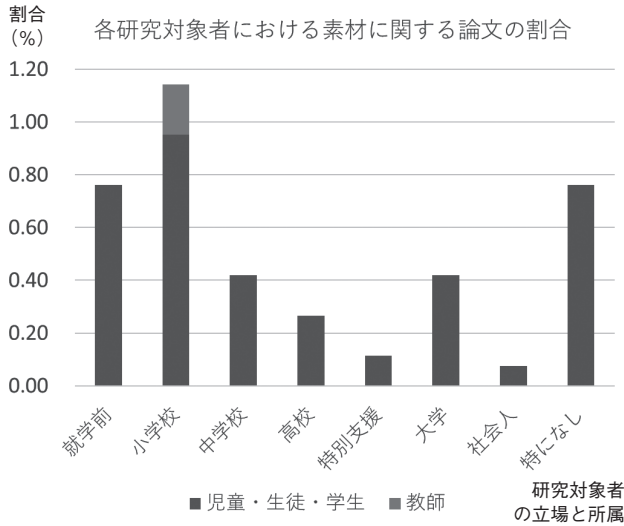


図3 研究対象者の立場と所属

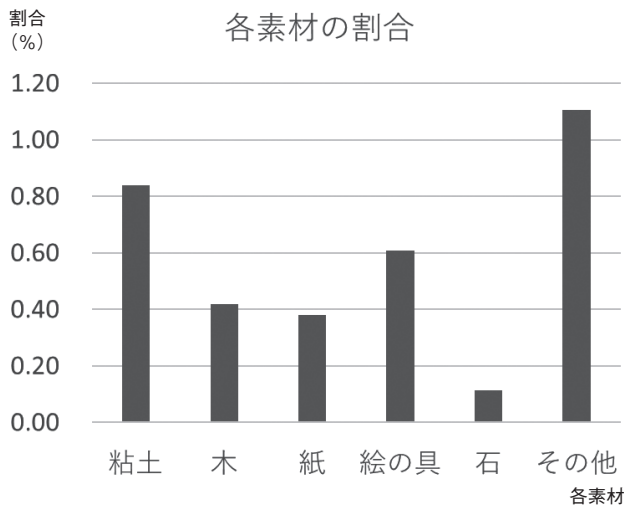


図4 素材の種類

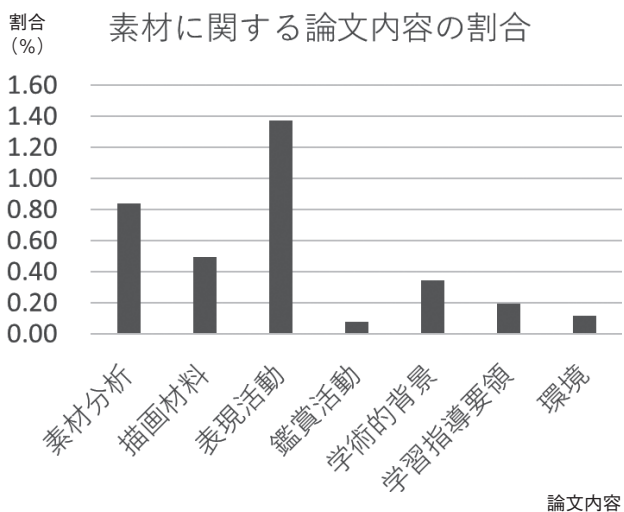


図5 素材に関する論文内容の割合

表2 素材に関する分類

項目名	内容
素材分析	<p>研究で取り上げた素材の特性や特徴に関する論文。教材研究としての意味を持たせ、素材の特徴から、教材としての有効性について等の検討を行っている論文。</p> <p>【例】 大平修也「工芸による造形的自己変革がつくる共感的な場に関する研究 橋本真之の鍛金の実習に着目して」『美術教育学研究』52.1, 2020, pp.97-104.</p>
描画材料	<p>絵画等の平面作品の制作で用いる描画材としての可能性について検討を行っている論文。</p> <p>【例】 市川加那子「日本画における金属箔の輝きを抑える方法とその効果について」『美術教育学研究』52.1, 2020, pp.25-32.</p>
表現活動	<p>特定の素材を用いた表現活動が研究対象者に与えた影響について検討を行っている論文。</p> <p>【例】 南雲まき「ポーランド初等教育の美術における技法、材料についての調査研究—版画技法「リノカット」の実践を通して—」『美術教育学研究』54.1, 2022, pp.209-216.</p>
鑑賞活動	<p>特定の素材を用いた鑑賞活動が研究対象者に与えた影響について検討を行っている論文。</p> <p>【例】 金好友子「茶陶における露胎の賞玩に関する研究—茶人がみた土の様子とその重要性—」『美術教育学研究』53.1, 2021, pp.73-80.</p>
学術的背景	<p>特定の素材に関する先行研究で示された理論や、素材の歴史に関する検討を行っている論文。</p> <p>【例】 金子一夫「美術教育学における贈与交換システムの複合的構造 参照源の構造、及び学習者間交換」『美術教育学：美術科教育学会誌』41, 2020, pp.85-96.</p>
学習指導要領	<p>これまでの学習指導要領における素材の取り扱い方や、その変遷等について検討を行っている論文。</p> <p>【例】 千凡晋「小学校教員養成における図画工作科の教材・指導法の研究—粘土類を用いた授業事例を通して—」『美術教育学研究』54.1, 2022, pp.193-200.</p>
環境	<p>教育環境として特定の素材が持つ意義や、子どもへの影響について検討を行っている論文。</p> <p>【例】 真宮美奈子・竹井史「「ねんど場」における遊びの様相とその援助—保育教材としての土素材による子どもの学びに着目して—」『美術教育学研究』50.1, 2018, pp.329-336.</p>

「白紙の場合」における子どもの絵画表現を比較した²⁴⁾。小田らの調査では、輪郭画用紙は「全年齢にとって着色面積を大きくした」という結果が得られた²⁵⁾。特に「5歳児に輪郭画用紙を提示することは、子どもの絵画表現を最も活性化させる」ということが明らかになっている²⁶⁾。しかし、6歳児にとっては「輪郭に依存した絵画表現になる傾向」があることも示された²⁷⁾。つまり、各年齢によって、支持体が与える影響は異なると言える。小田らは、幼児を対象としており、7歳児以上の調査はなされていない。そこで本研究において、12歳以上の中学生を対象として調査を進める妥当性が見えてきた。

ANCSの学習過程と、小田らの研究を照らし合わせると、輪郭画用紙を用いる活動を行う「授業によって」STEP1からSTEP2へ展開されたと言えよう。

また、2016年に行われた磯村知賢の研究では、「日常的に画用紙サイズを選ぶ活動を児童の描画過程に組み込んでいる者が少ない」という課題意識に基づいている²⁸⁾。磯村の課題意識は、本研究における課題意識と近い。ただし、磯村は画用紙の形に着目しているが、本研究では支持体の形だけでなく、大きさや色彩、材質にも着目している点において異なる。磯村の調査結果では、児童は「異なる作品イメージがあるにも関わらず、与えられた画用紙サイズに合うようにイメージを変容させた描画をする」ことを明らかにし、「作品サイズを選択を任せる授業の可能性」が示されている²⁹⁾。

表現の目的と素材とを合わせる点において、磯村の研究とアイスナーの主張とは合致する結果であると言えよう。画用紙に対する制作者の感情や思いを持つことの重要性について、ヴィクター・ローウェンフェルド (Viktor Lowenfeld) も「美術材料に対する「情緒的」関係がなければ、どのような美術表現も不可能 (竹内清ら訳)³⁰⁾」と述べた。つまり、生徒が画用紙に対して「楽しい」や「怖い」等の気持ちを持つ機会を学習活動の中に設けることの必要性があると言えよう。磯村の研究では、画用紙のサイズ選択や支持体である色画用紙を自分で作る活動が与える影響として、描画活動における変容については言及されていない。そのため、支持体の形や色彩が描画活動そのものに影響を与えるのかは、明らかになっていないとも言える。

ANCSの学習過程と、磯村の研究を照らし合わせると、「作品サイズを選択を任せる授業」により、STEP2のように、子どもが画用紙との新しい出会い方をすることとなる。四つ切画用紙の白銀比だけでなく、子ども一人ひとりにとっての心地よい比率を探ることは、清田が述べたように、「主体的な学

習への姿勢」を持つようになる可能性は高い。

(2) 立体作品の「素材」としての認識の強さ

集計結果から、素材に関する論文の特徴として、立体作品を作る表現活動での「素材」に関する研究であることが挙げられる。つまり、操作できる対象を「素材」と認識しているため、支持体を素材として認識しにくいという本稿の第4章で述べた仮説を支持するものであると言えよう。

その根拠として、図4の結果では、素材に関する論文で取り上げられている素材の多くが、立体作品に用いられることが多い粘土や木である。絵の具は、二番目に高い割合ではあるが、描画材であり、立体作品の材料としては取り扱われていない。紙という素材も、絵の具の次に高い割合ではあるものの、絵画制作での支持体を取り上げた調査は、前節で述べた小田らと磯村の研究のみである。紙を取り上げた論文の多くが、立体作品の素材として想定していることとなる。その要因に、磯村の課題意識が関係している可能性は高い。つまり、描画活動において、支持体の選択も表現活動として捉えられていない現状を示唆する結果になったと言えよう。

しかし、図2をみると、2017年以降は、素材に関する論文の割合も増加しつつある。さらに、2017年以降、毎年中学生を対象とした素材に関する論文が掲載されている。

それは、現行の学習指導要領の〔共通事項〕の「A表現」(2)において、形や色彩だけでなく「材料などが感情にもたらす効果や、心情などと関連づけて全体のイメージでとらえることが大切である³¹⁾」という表記があるように、材料の持つ造形的な効果や表現意図との密接な関係について言及するようになったことも要因となった可能性は高い。そして、第4章第2節で述べた臨時教育審議会での答申や学習指導要領からも、検討する必要性を確認できた。

8 今後の展望

本稿では、第一次研究として、創造性教育が重要視されるようになったと考えられる時期から現在に至るまでの、素材に関する先行研究を調べ、その傾向について考察した。その結果、中学校教育における表現活動において、画用紙等の支持体を検討する機会が少ない現状を確認できた。しかし、創造性の育成を目指す表現活動における素材の役割については、先行研究から検討することはできなかった。

そこで、第二次研究では、本稿での調査を踏まえ、中学生を対象とした実践研究を進めていきたい。本

研究の最終段階では、生徒自らが、表現活動を通して新しい価値を生みだせるような、創造性を育成す

る美術科のカリキュラムの構築を目指す。

註

- 1) Ronald A.Beghetto; C.Kaufman “*Beyond Big and Little : The Four C Model of Creativity*”, *Review of General Psychology*, 13 (1), 2009, pp.1-12.
- 2) *ibid*, pp.1-12.
- 3) *ibid*, pp.1-12.
- 4) *ibid*, pp.1-12.
- 5) Mihaly Csikszentmihalyi “*Creativity : The Psychology of Discovery and Invention*”, Harper Perennial, 2013, pp.26-27.
- 6) *ibid*, pp.26-27.
- 7) Beghetto ; Kaufman 2009, pp.1-12.
- 8) *ibid*, pp.1-12.
- 9) *ibid*, pp.1-12.
- 10) *ibid*, pp.1-12.
- 11) 清田哲男「創造性が社会と出会う美術教育のためのカリキュラムの構築と学習効果の研究」, 『美術教育学研究』第50号, 2018, pp.153-160.
- 12) 同上, pp.153-160.
- 13) 同上, pp.153-160.
- 14) 竹内敏雄『美学事典』, 弘文堂, 1970, p.192.
- 15) E.W.アイズナー 著, 仲瀬律久他 訳『美術教育と子どもの知的発達』, 黎明書房, 1986, p.222.
- 16) 同上, p.222.
- 17) 真鍋一男・宮脇理 監修, 伊藤彌四夫 著「17. 絵画」『造形教育事典』, 建吊社, 1991, p.297.
- 18) 同上, p.297.
- 19) 東山明『美術教育と人間形成—理念と実践』, 創元社, 1986, p.135.
- 20) 文部科学省「Society5.0に向けた人材育成に係る大臣懇談会」文部科学省HP, 2023年8月30日閲覧 〈https://www.mext.go.jp/component/a_menu/other/detail/_icsFiles/afieldfile/2018/06/06/1405844_002.pdf〉
- 21) 臨時教育審議会「教育改革に関する答申—臨時教育審議会答申第四次(最終)答申—」2023年8月30日閲覧, 〈<https://www.niye.go.jp/youth/book/files/items/1538/File/yojitooshin.pdf>〉
- 22) 弓野憲一『世界の創造性教育』, ナカニシヤ出版, 2005, pp.115-134.
- 23) 小田久美子・高橋敏之「絵本の読み聞かせ後の輪郭画用紙と白色画用紙における子どもの絵画表現の比較」『美術教育』第289号, 2006, pp.28-35.
- 24) 同上, pp.28-35.
- 25) 同上, pp.28-35.
- 26) 同上, pp.28-35.
- 27) 同上, pp.28-35.
- 28) 磯村知賢「図画工作での描画活動における作品および画用紙のサイズに対する意識の考察」『美術教育学研究』第48号, 2016, pp.65-72.
- 29) 同上, pp.65-72.
- 30) V.ローウェンフェルド 著, 竹内清 訳『美術による人間形成』, 黎明書房, 1989, p.128.
- 31) 文部科学省「中学校学習指導要領(平成29年告示)解説 美術編」東洋館出版社, 2018, p.49.